ラグビー高校トッププレーヤーの心理的特性に関する研究

勝田　隆，粟木一博

研究目的

競技スポーツにおいて，実力あるいは技術以上に心理的な要因が試合の結果を左右することは経験的によく知られている．つまり，技術，戦術的な側面だけではなく心理的な適性が備わっていることも一流選手にとって必要不可欠な条件となる．松田他の開発したTSMI[6)7)8)10)]によって様々な競技種目における競技力と競技意欲との関係が明らかにされている[1)3)5)]．また，卓球の全日本レベルの選手と高校総体レベルの選手との比較によってコーチ受容の下位尺度を除く16の下位尺度で差を見いだした岡沢他の研究[10)]，ホッケー選手を対象として勝利志向性，対コーチ不適応，闘志，不節制の下位項目で競技レベルの差を見いだした吉沢他の研究[12)]，さらに，バスケットボール選手を対象として競技レベルで12の下位尺度，競技成績で10の下位尺度，スターティングメンバーと控え選手との間で，５つの下位尺度において差を見いだした吉沢他の研究[13)]などによってTSMIの識別力が明らかにされている．心理的な適性の中には認知スタイル，パーソナリティ特性，過去経験などの要因が含まれる．これらの適性については比較的安定している特性的側面と社会的な状況の変化などに左右されやすい状況的側面とが考えられてきた[2)]．本研究で取り上げたTSMIによって測定されるスポーツ競技に対する意欲などは社会的状況要因の影響を受けやすい．吉沢はTSMIを用いて女子ホッケー選手の縦断的研究を行っており，その結果下位尺度の中でも社会的環境の影響を受けやすいものとそうでないものとが存在することを見いだしている[14)]．また，鶴原らは，卓球競技において海外遠征に参加する全日本代表を選抜する合宿において，選手選考の方法がTSMI得点に影響を与えていることを明らかにしている[11)]。以上から，代表選考のために生じる精神的な強いプレッシャーや、あるいは代表選考後も周囲からの強い期待によるプレッシャーなどによって、代表選考が進んだ段階、または代表に選考された後に、緊張性不安・失敗不安が高くなることが考えられる。この変化は、今までに代表に選ばれたことのない選手や、選考合宿に参加する選手を輩出していない高校から選ばれた選手においてより顕著であろうと考えられる。また、コーチングのスタイル、対戦相手、チームメイトのレベルが高くなったことによる意欲の高まりも予想される。しかし同時に、先に述べたいくつかの要因が、自信の喪失などに結びつくという逆の可能性も考えられる。

そこで本研究では、ラグビー高校日本代表の海外遠征に向けた強化合宿およびそのための代表選考合宿を通して、選手がどのような心理的な傾向を示したかをいくつかの中心的事例を通して明らかにすることを目的とする．

研究方法

(1) 調査内容

TSMI（Taikyo Sport Motivation Inventory：日本体育協会競技動機調査）を実施した．この質問紙は，146項目，18因子からなり，スポーツ選手の競技意欲を調査するものである[6)7)8)10)]

(2) 調査対象

平成5年3月に高校日本代表選手としてイングランドに遠征した25名。

(3) 調査手続き

平成5年3月に行われた高校日本代表イングランド遠征のための選考合宿（3回）から25名選考後の強化合宿（3回）全6回の合宿すべてにおいて、参加選手全員に対し、合宿第1日目に全選手を一室に集め，回答方法などに関する説明後一斉にTSMIを実施した。

なお、「対コーチ不適応」と「コーチ受容」の二つの尺度については、合宿でのコーチングスタッフと所属している高校の指導者とが、回答に際して明確に区別されていない可能性が考えられるため分析の対象から除外した。

TSMIの得点には標準得点（スタナイン尺度）を用いた。

(4) 調査を実施した合宿について

年6回の高校代表に関わる合宿は、代表選手を選考することを目的としたものと、代表選考後編成された代表チームの海外遠征に向けた強化を目的とした二つに大別できる。前者は候補合宿とよばれ3回実施されており、中でも第3次合宿（第3回測定時）は、代表選考のための最終合宿として、あらかじめ選手に理解されていた。後者は代表強化合宿とよばれ、選ばれた25名の選手の遠征に向けた強化とナショナルプレヤーとしてのあり方を指導の柱に置いたものであり、代表選考後3回実施されている。

［第1回・第2回の測定］

この合宿は全国トップレベルの高校選手の強化を目的として、毎年この時期に行われているものであり、同時に翌年の3月に行われる海外遠征選手（25名）の選考も兼ねている。

それぞれの測定日は、第1回が平成4年7月27日、第2回が平成4年10月7日であった。

［第3回目の測定：平成5年1月12日］

この合宿は平成5年3月に行われた高校日本代表海外遠征に参加する選手の最終選考を主たる目的として、毎年この時期に行われているものであり、この合宿参加者の中から25名が選考された。

［第4回～第6回の測定］

この合宿は平成5年3月に行われた高校日本代表イングランド遠征に参加した選手の強化を目的として行われた。各測定日は次のとおりである。

第4回（平成5年1月29日）・第5回（平成5年2月7日）・第6回（平成5年2月19日）

結果と考察

表1は、各合宿時におけるTSMIの得点の平均値と標準偏差を示したものである。考察にあたっては、6回の合宿を通して顕著な傾向が見られたいくつかの事例を尺度ごとに取り上げた。さらに、コーチングスタッフの総合的な意見や選手の試合および練習でのパフォーマンスと関連させて、これらの傾向の解釈を付け加えた。

1）TSMI－1「目標への挑戦」

図1は、この因子におけるA選手，L選手，I選手の得点を示している。この3選手は、他の選手と比べて6回すべての測定時において高いレベルで安定した得点を記録している。この3選手は代表チームの中心選手であり、この遠征で最も活躍し成長した選手であったという共通の特徴をもっている。この点について代表チームのコーチングスタッフは、遠征報告書[4)]においてこの3名のパフォーマンスに高い評価を与えている。また、A選手とL選手は遠征全試合に出場し、帰国時にはチーム全員の投票に

表１　各強化合宿時におけるTSMIの各尺度の平均値と標準偏差

	M / SD	候補１次 N＝15	候補２次 N＝15	候補３次 N＝25	代表１次 N＝25	代表２次 N＝24	代表３次 N＝24
1. 目標への挑戦	M	5.1	5.7	5.2	5.7	5.7	5.3
	SD	1.3	1.06	1.39	1.76	1.18	1.28
2. 技術向上意欲	M	5.3	5.6	5.1	5.2	4.9	4.8
	SD	1.6	1.82	1.55	1.78	1.35	1.55
3. 困難の克服	M	4.9	5.1	4.6	5.1	4.7	4.5
	SD	1.6	1.39	1.44	1.67	1.37	1.61
4. 勝利志向性	M	4.7	5.3	5	5.4	6.2	5.8
	SD	1.5	1.84	1.66	1.98	1.52	1.41
5. 失敗不安	M	4.1	3.9	4	3.2	3.8	3.6
	SD	1.8	1.5	1.68	1.94	1.6	1.41
6. 緊張性不安	M	3.5	3.7	3.5	3.5	4	4.3
	SD	1.4	1.53	1.6	1.3	0.93	1.3
7. 冷静な判断(情緒安定性)	M	5.9	6	6	6.1	6.5	6.5
	SD	1.4	1.1	1.57	1.58	1.26	1.41
8. 精神的強靭さ	M	4.3	5.7	6.1	6	6.3	6.2
	SD	1.9	1.34	1.65	1.96	1.57	1.52
9. コーチ受容	M	5	5.7	5.1	5.5	5.8	5.3
	SD	1.8	1.34	1.66	1.53	1.26	1.43
10. 対コーチ不適応	M	4.8	4.5	4.6	4.4	4.7	4.8
	SD	1.3	1.15	1.65	1.62	1.1	1.45
11. 闘　志	M	5.4	5.5	5.4	5.6	6	5
	SD	1.3	1.31	1.98	1.88	1.42	1.63
12. 知的興味	M	6.1	5.5	5.4	6	6	5.5
	SD	1.3	2.06	1.98	1.61	1.49	1.85
13. 不制御	M	5.6	5.1	5.8	5.8	6.3	6.6
	SD	1.2	1.48	1.52	1.3	1.67	1.12
14. 練習意欲	M	5.7	5.2	5.5	5.4	5.9	5.7
	SD	1.5	1.87	1.98	1.9	1.47	1.59
15. 競技的価値観	M	3.1	2.9	2.9	3.8	3.3	3.5
	SD	1.1	1.02	1.06	1.49	1.03	0.87
16. 計画性	M	6.4	6.4	6	5.7	5.7	5.9
	SD	1.3	1.54	1.44	1.97	1.49	1.5
17. 努力への因果帰属	M	4.1	4.4	3.7	4.2	4.2	4.1
	SD	1.7	1.78	2.15	2	1.87	1.69

より、それぞれ最優秀選手と優秀選手（１名）に選ばれている。

2）TSMI－2「技術向上意欲」

図２は、この因子におけるＤ選手とＣ選手の得点を示している。

Ｄ選手が所属する高校のラグビーチームは、従来選考にのぼる選手を輩出していない。つまりこの選手は候補選手に選考されるまで、まったくといってよいほど高いレベルのコーチングを受けたことがない。代表合宿を重ねるごとにこの因子の得点を低下させていたことは、コーチングを受動的に受けることで自己の工夫による技術向上に対する意欲を低減させていった可能性が考えられる。

また、Ｃ選手の得点はすべての測定時において、他の選手と比べ極端に低い。Ｃ選手はは遠征前代表合宿において、その練習態度（練習への参加時刻の遅れなど）についてコーチから指摘を受けている。原因は明らかではないが練習へ臨む態度との関連性が見られることからこの事例を取り上げた。

3）TSMI－3「困難の克服」

図３は、この因子におけるＣ選手の得点を示している。Ｃ選手の得点は、ほとんどの測定時

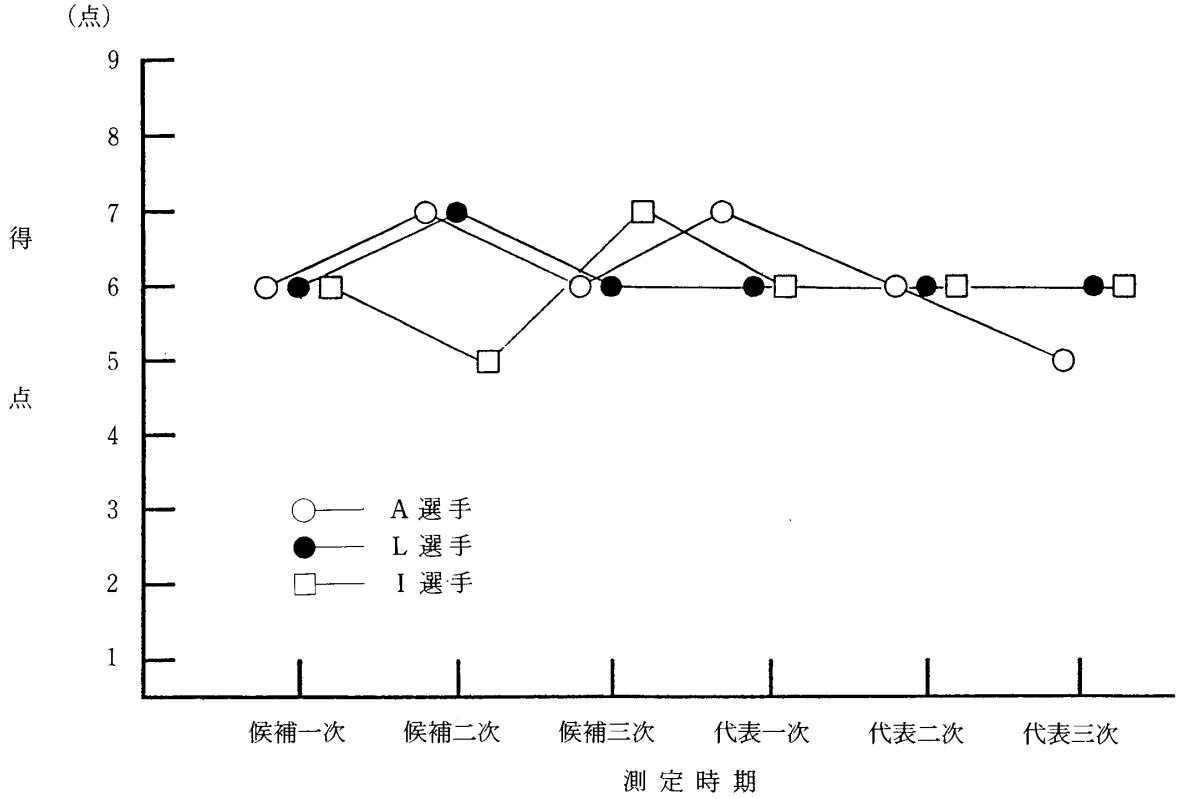

図1　各測定時における TSMI 得点（目標への挑戦尺度）

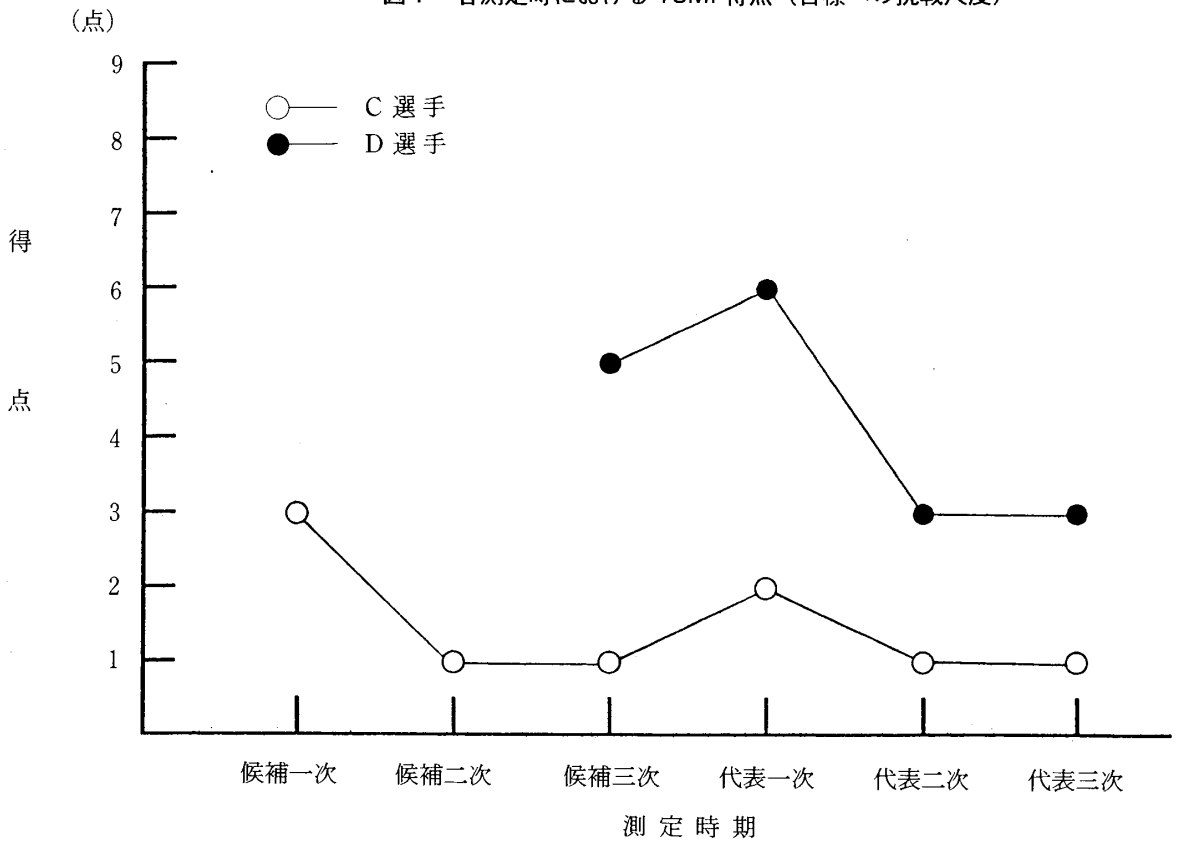

図2　各測定時における TSMI 得点（技術向上意欲尺度）

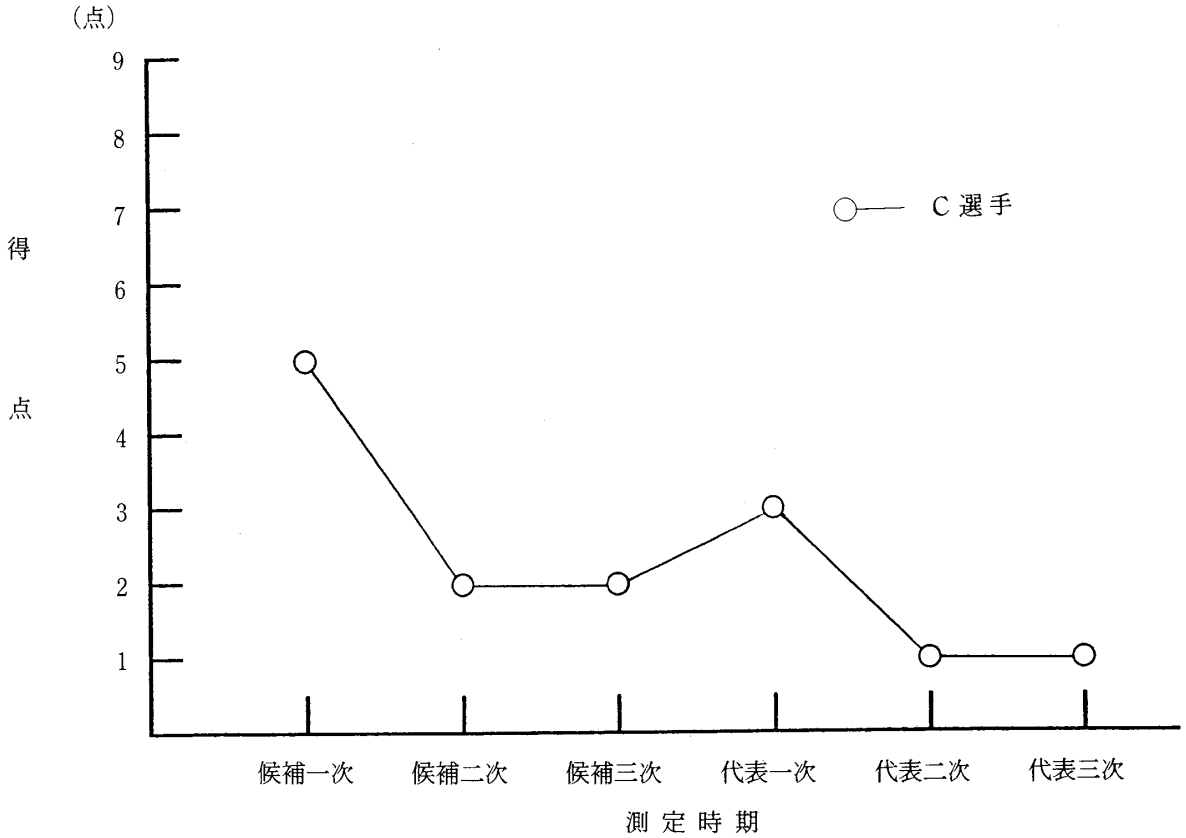

図3　各測定時におけるTSMI得点（困難の克服尺度）

において他と比べ低く、特に代表2次・3次合宿時の得点が低くなっている。代表2次・3次合宿は、6回の合宿の中でも練習スケジュールが過密であった。しかしC選手は、この2つの合宿が例年彼の学校で行われていることもあり、その内容を十分把握しており、そのことによる慣れなどがこの尺度に影響を及ぼしたものと考えられる。

4) TSMI－4「勝利志向性」

図4は、この因子におけるD選手とH選手の得点推移を示している。従来、候補選手も含め代表選手を輩出していない高校から選出されたD選手は、第1回・第3回とも最低得点を記録していたが、代表選考後その値は向上している（第2回の記録は合宿不参加のためなし）。D選手は今までほとんど勝ったことのないチームに所属している。しかし、代表チームに選ばれたことで、チームレベルの向上に伴い、ゲームの勝敗に対して強い意識を持ったものと考えられる。

H選手は、第4回測定時のみ異常に高い得点を記録している。H選手は、この測定日の数日前に高校日本代表チームのキャプテンを命じられており、このことが彼の心理に影響を与え、この結果となって表れたものと考えられる。

5) TSMI－5「失敗不安」

図5は、このこの因子におけるA選手，E選手，G選手，N選手の得点の推移を表し、図6はB選手，F選手，K選手，M選手の得点推移を示している。

A選手，E選手，G選手，N選手の得点は、他の選手と比べて常に低く、逆にB選手，F選手，K選手，M選手は、相対的に高くなっている。この結果は、遠征における試合出場回数と関連していたように思われる。つまり、失敗不安の低かった前記4名が、遠征において中心的

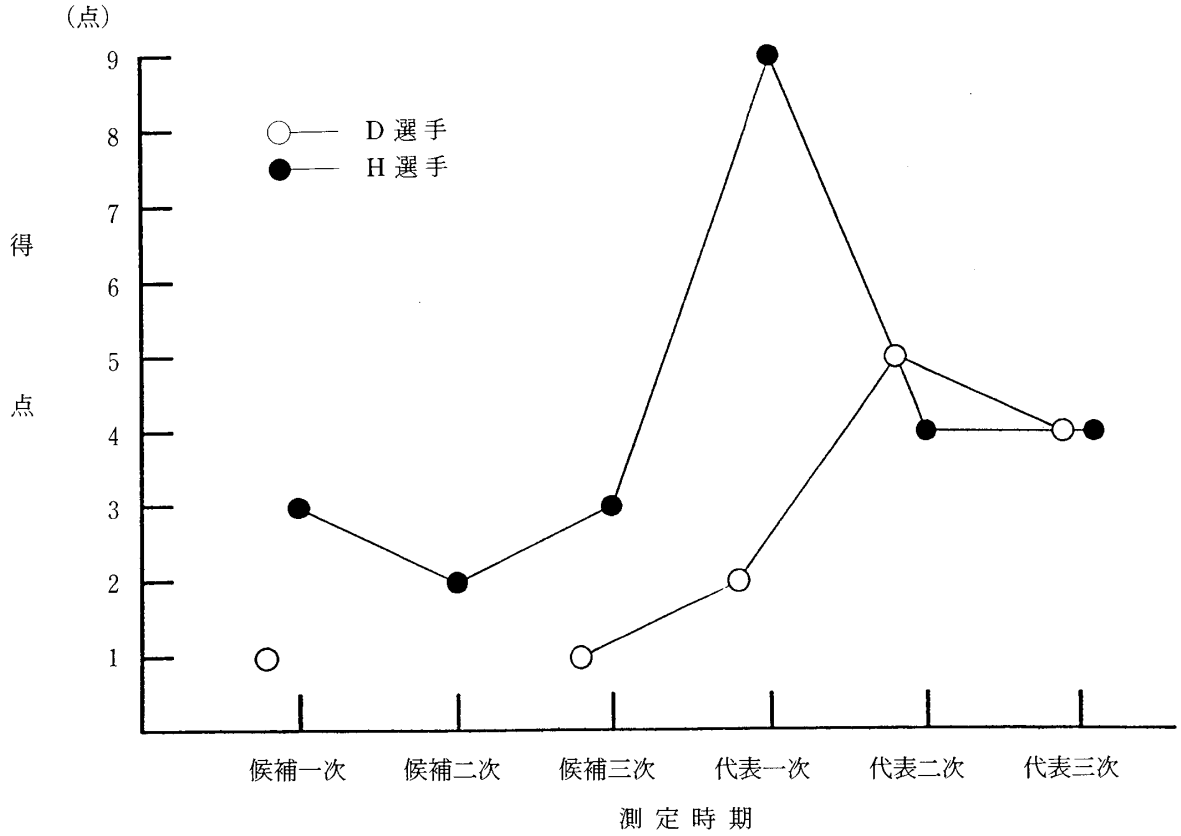

図 4　各測定時における TSMI 得点（勝利志向性尺度）

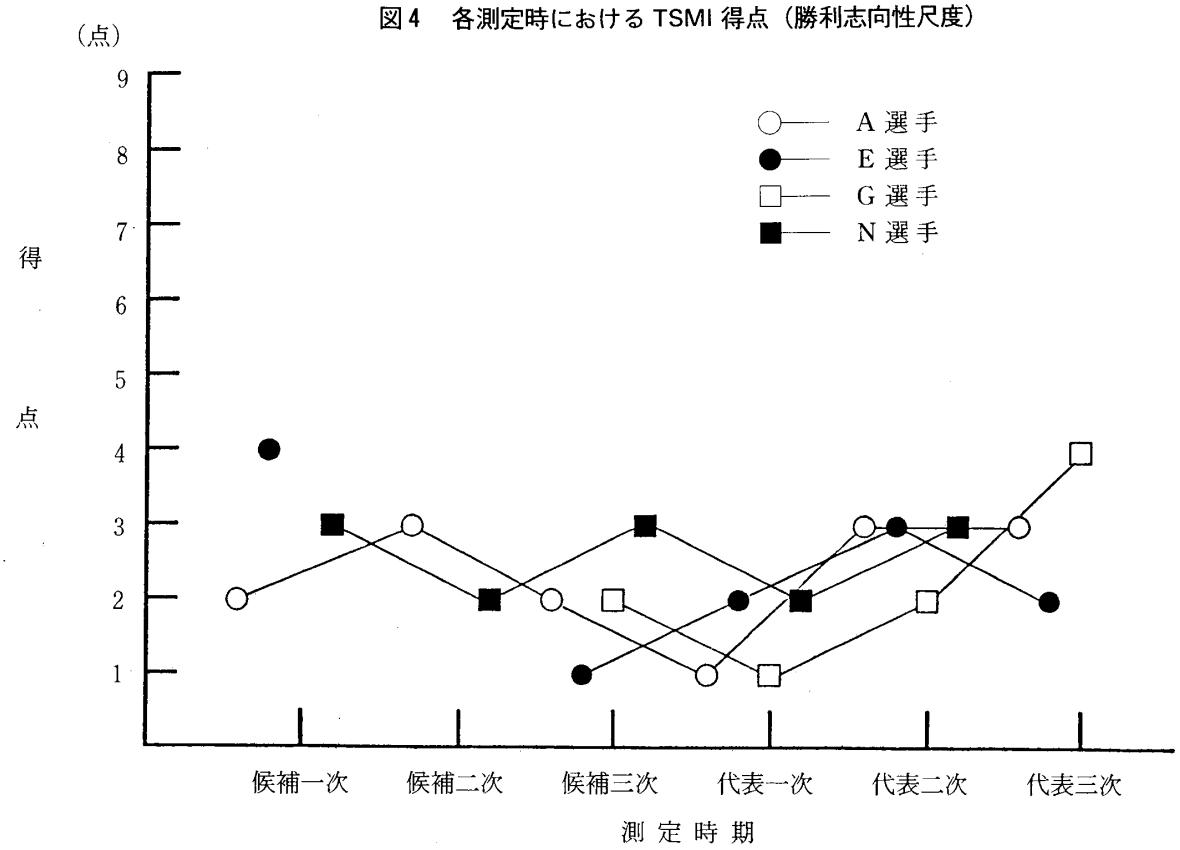

図 5　各測定時における TSMI 得点（失敗不安尺度）

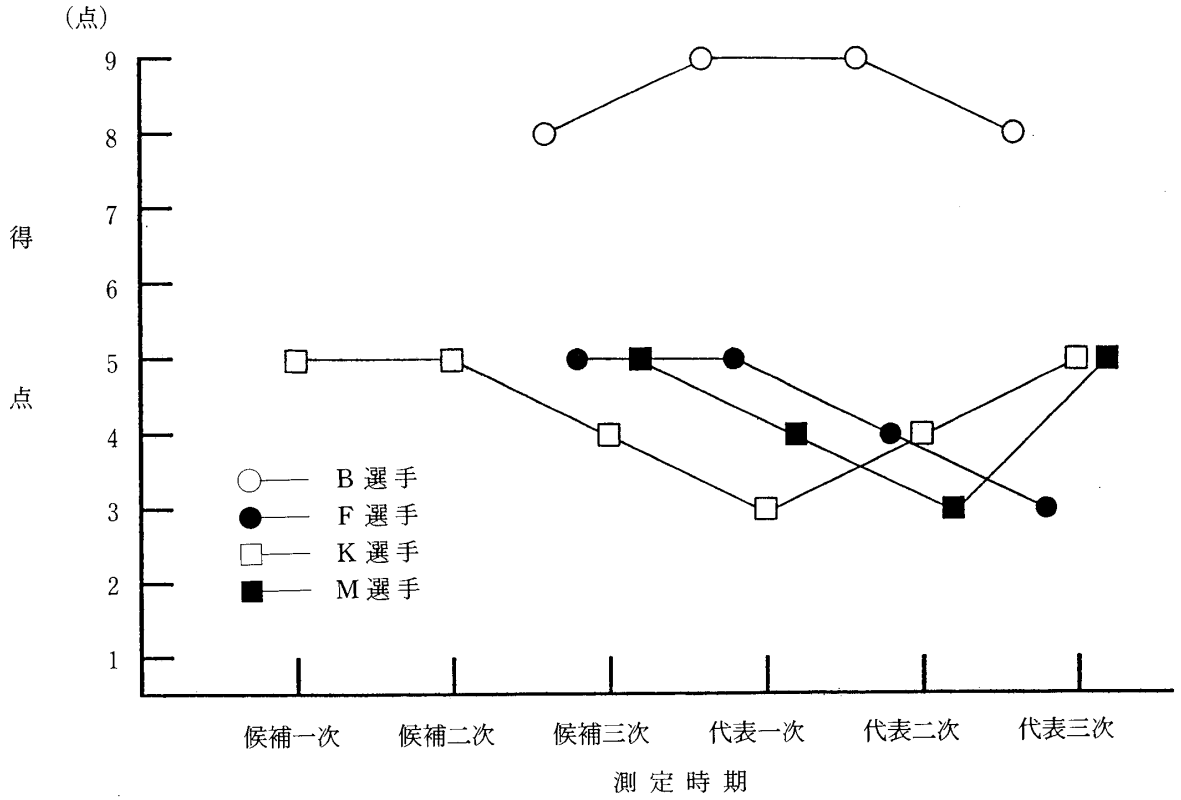

図6　各測定時におけるTSMI得点（失敗不安尺度）

な活躍をし、レギュラー的な存在であったのに対し、失敗不安の高かった4名は、どちらかというとリザーブ的存在であり、特にB選手とK選手は、遠征5試合において、1試合しか出場できなかった3名中の2名であった。競技レベルが試合での不安を増幅させたものと考える。

図7は、H選手とD選手の得点を示している。遠征チームのキャプテンとなったH選手は、TSMI-6と同様、代表チーム最初の合宿時（第3回測定時）のみ、非常に高い得点を記録している。測定日の数日前にキャプテンを命じられたことが、ここでも心理的なストレスを与えた結果であると推測できる。このことは、測定日の翌日H選手がコーチに対し「キャプテンとして何をすべきか」といった内容の相談をしていることからも明らかである。

従来，代表選手を輩出していない高校から選ばれたD選手は、候補合宿時には非常に低かった失敗不安が、代表入りした後、徐々に高くなってる。代表チームに入ったことで、それまでと大きく変化した環境（例えば、チームメイトとの競技レベルなど）が、自己の技術に対する不安感に影響を及ぼしたものと考えられる。

6）TSMI-6「緊張性不安」

図8は、B選手，D選手，K選手，F選手の得点を示している。

無名校から選ばれたD選手の得点は、候補合宿時（第1回・第2回測定時）において、それぞれ非常に低い得点であったのが、代表選考後しだいに高くなっている。県内でほとんど勝ったことのないチームから一挙にトップレベルのチームに加わったことで、心理的にプレッシャーを感じていたものと考えられる。

B選手，K選手およびF選手は、他の選手と比べて常に高い得点を記録している。この3名に対するコーチの評価は共通しており，「この3名は、遠征においてリザーブ的存在であり、3回の代表強化合宿から遠征を通じて、プレー

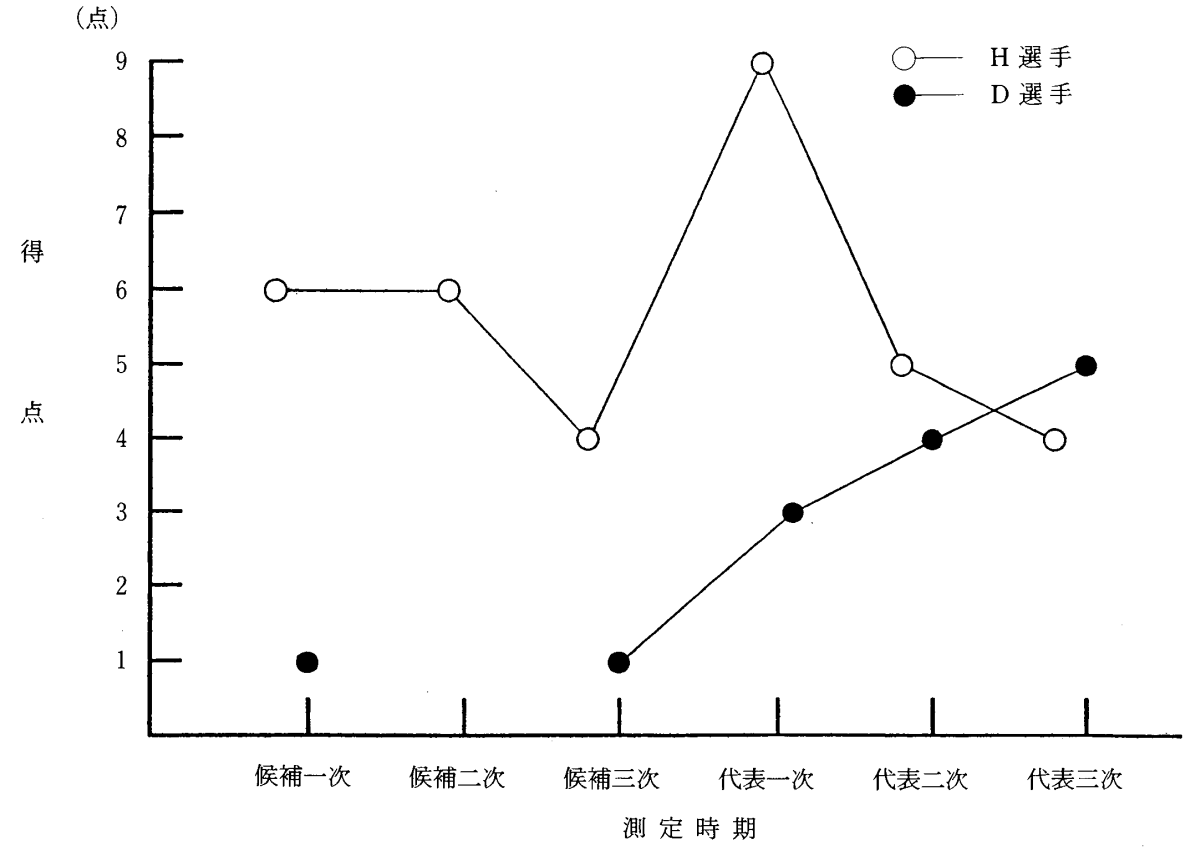

図7　各測定時における TSMI 得点（失敗不安尺度）

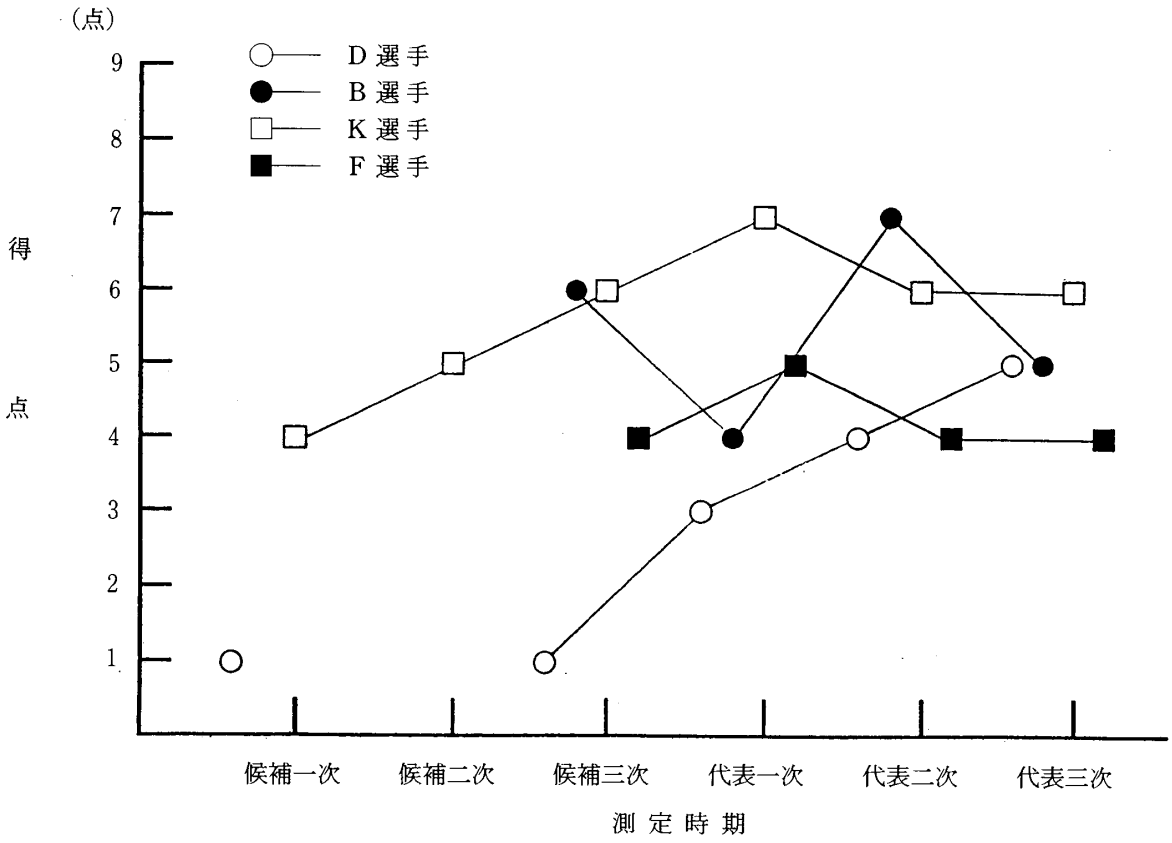

図8　各測定時における TSMI 得点（緊張性不安尺度）

上大きな成長が見られなかった。」との報告がなされている。3名は常に緊張し不安をもって合宿に参加していたと推測され，緊張性不安がパフォーマンスに影響を及ぼした典型的な事例と考えられる。

7）TSMI－8「精神的強靭さ」

図9は、J選手の得点の推移を示している。この選手は、第3次候補（最終選考）合宿から参加した選手であり、代表第1次合宿時に大きな変化を見せている。代表に選ばれたことが、心理的に大きな影響を及ぼしたものと考えられる。J選手は、遠征において特に自主的にかつ意欲をもって行動していた選手であり、そのプレーぶりは、遠征中大きく成長した選手であった[9]。監督はJ選手について次のようにコメントしている。「僕がふらっと町に散歩に出かけたら、J選手が自主的に走っている。前の晩も一人で走っていたという…」。継続的で自主的な練習が、この尺度の得点を高いものにしていると考えられる。

8）TSMI－12「知的興味」

図10は、H選手の得点を示しており、キャプテンを命じられた直後の測定時（第4回）に著しい変化を見せている。練習やゲームの総合的な把握、合宿における生活面の管理など、キャプテンというチームの中の役割に対する認識が得点の向上に寄与しているものと考えられる。

9）TSMI－14「練習意欲」

図11は、この因子において、代表選考前と選考後に得点傾向の違いが見られた2名の選手の得点推移を示している。C選手，K選手は、代表選考後その得点を低くしており、「技術向上意欲」および「緊張性不安」の項で述べたようにコーチングスタッフによる練習態度に対する評価と密接に関連しているものと考えられる。また，

10）TSMI－15「競技的価値観」

この因子の平均得点は、ほとんどの測定時に

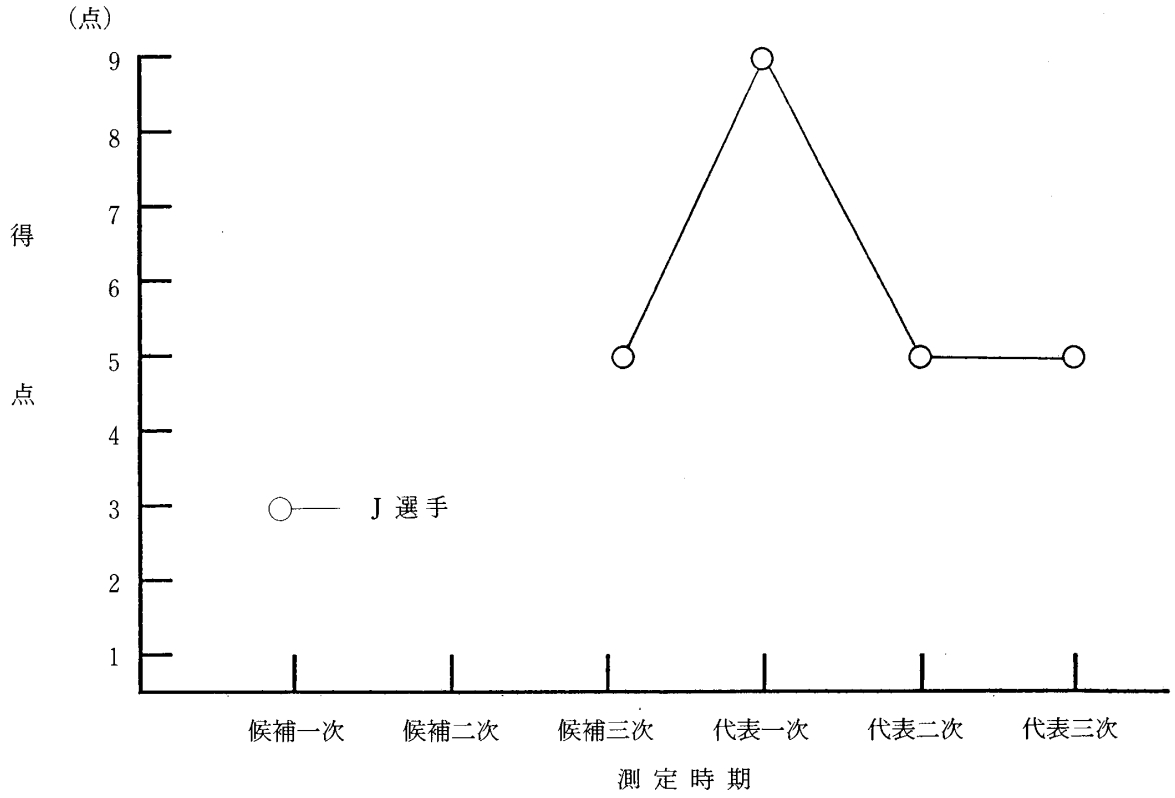

図9　各測定時におけるTSMI得点（精神的強靭さ尺度）

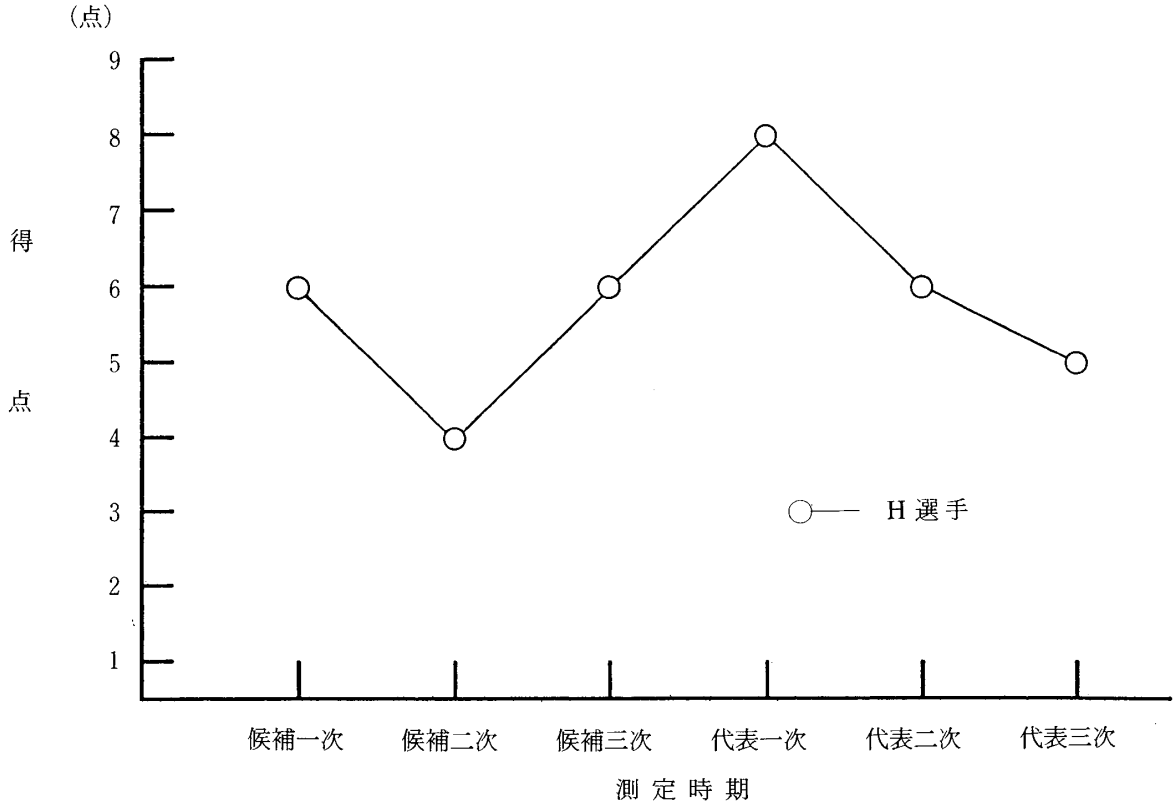

図10　各測定時における TSMI 得点（知的興味尺度）

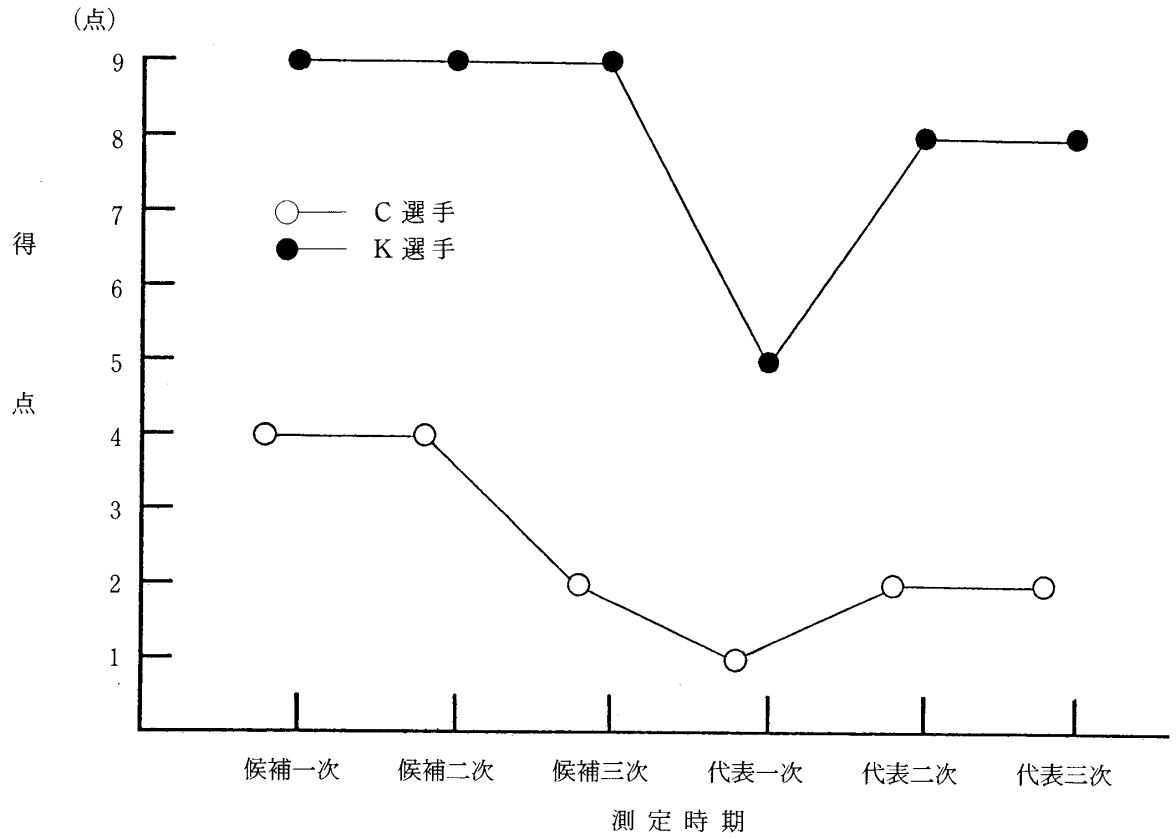

図11　各測定時における TSMI 得点（練習意欲尺度）

おいて、他の因子と比べ特に低い値を記録していた（表１）。この傾向は、競技力向上に重点を置き，ラグビーの競技的価値に関する指導が十分に行われなかったコーチングスタイルとも関連があると考えられるため、競技の価値に対する指導方法も含め、今後のコーチングの課題としなければならない。

11）TSMI－16「計画性」

図12は、H選手の得点を示しており、ここでもキャプテンを命じられた直後の測定時（第４回）に著しい変化を見せている。キャプテンという練習計画や行動計画に直接関係する急激な立場の変化が影響しているものと考えられる。

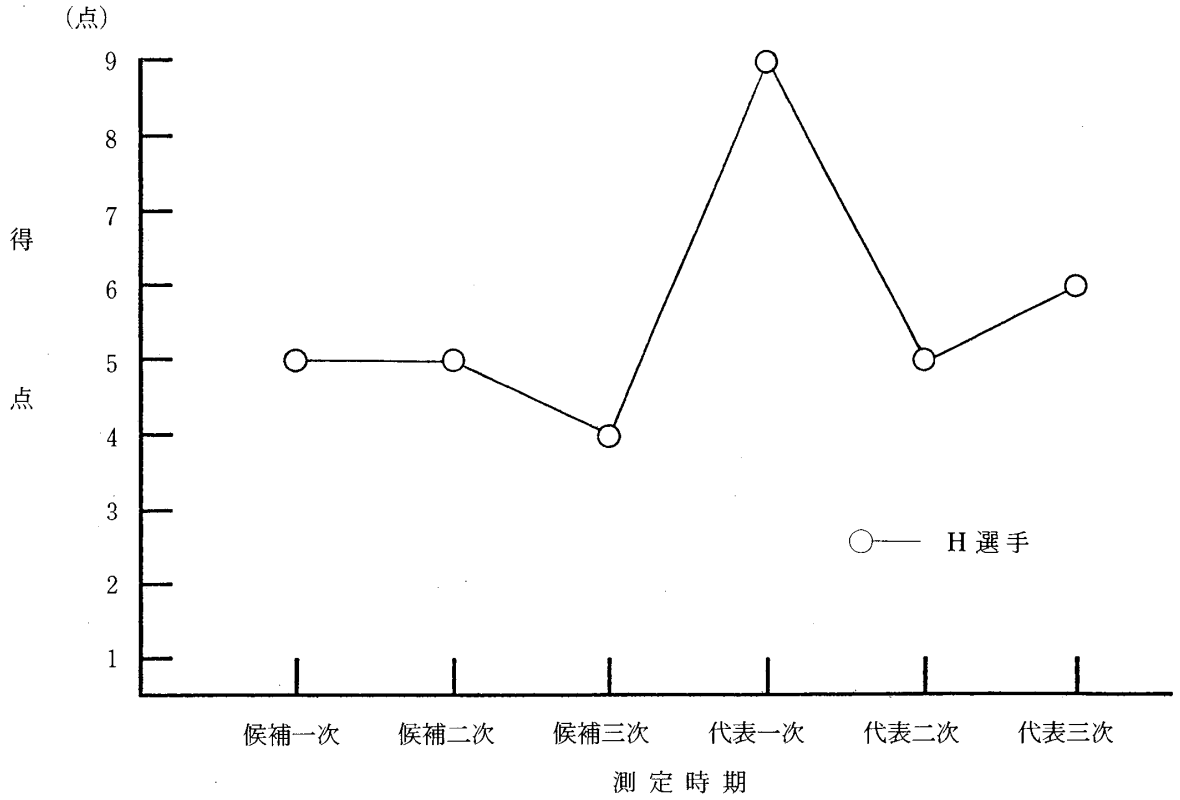

図12　各測定時における TSMI 得点（計画性尺度）

ま と め

高校日本代表チームの選考から強化を目的とした６回の合宿に参加した選手の，競技に対する心理状態の変化をTSMIを用いて系列的に測定した。事例的にまとめられた結果は以下のとおりである。

1）　従来、代表選手を輩出したことのない高校出身者の緊張性不安・失敗不安は、代表に選考　された後高くなる傾向にあった。

2）　失敗不安と緊張性不安の尺度は、代表チームにおいてレギュラーの位置にあり高いパフォーマンスを示した選手は低く、リザーブの選手は高くなる傾向にあった。またレギュラー選手は目標への挑戦尺度においても高い得点を示した。

3）　キャプテンというチームの中心的役割が、不安や計画性などのいくつかの尺度で特徴的な傾向を示す事例が見られた。

4）　練習態度に関するコーチングスタッフの評価と技術向上意欲および練習意欲尺度の得点との間に、高い関連性が考えられる事例が見られた。

参考文献

1) 遠藤俊郎「バレーボール競技者の心理的適性に関する研究(2) —我が国の競技レベルにおけるトッププレーヤに関して—」 山梨大学教育学部研究報告，第36号，p.145-152，1986.

2) Hollander, E.P.: Principles and methods of social psychology. New York: Oxford University Press. 1967

3) 堀本宏，岡沢祥訓，吉沢洋二，猪俣公宏「中国ジュニアー女子選手権大会代表チームと日本ユニバーシアード代表バスケットボール選手のTSMIの特徴」スポーツ心理学研究，12-1，p.58-60，1985.

4) 勝田隆，新井均，池戸成記「1993高校日本代表イングランド遠征報告書」日本ラグビーフットボール協会，1993.

5) 久保玄次，加賀秀夫「愛媛県代表国体出場選手における競技種目類型及び競技成績とTSMIの得点との関係」スポーツ心理学研究，14-1，p.100-109，1987.

6) 松田岩男，猪俣公宏，落合優，加賀秀夫，下山剛，杉原隆，藤田厚，伊藤静夫「昭和55年度日本体育協会スポーツ科学研究報告№Ⅳスポーツ選手の心理的適性に関する研究 —第1報，第2報—」日本体育協会，1980.

7) 松田岩男，猪俣公宏，落合優，加賀秀夫，下山剛，杉原隆，藤田厚，伊藤静夫「昭和56年度日本体育協会スポーツ科学研究報告№Ⅲスポーツ選手の心理的適性に関する研究 —第3報—」日本体育協会，1981.

8) 松田岩男，猪俣公宏，落合優，加賀秀夫，下山剛，杉原隆，藤田厚，伊藤静夫「昭和57年度日本体育協会スポーツ科学研究報告№Ⅵスポーツ選手の心理的適性に関する研究 —第4報—」日本体育協会，1982.

9) 森本優子「イングランド高校代表に初勝利」ラグビーマガジン，Vol.6, p.133，1993.

10) 岡沢祥訓，猪俣公宏「トップレベルの卓球選手の心理的適性に関する研究」総合保健体育科学，Vol.6,№1，p. 81-89，1983.

11) 鶴原清志，岡沢祥訓 「卓球サドンデス合宿の選抜結果がTSMIの得点に与える影響」日本スポーツ心理学会第13回大会抄録，1986.

12) 吉沢洋二，猪俣公宏，岡沢祥訓「ホッケーの女子トッププレーヤーの心理的適性について」総合保健体育科学，Vol.6,№1，p.113-121，1983.

13) 吉沢洋二，猪俣公宏，岡沢祥訓「バスケットボール選手の心理的適性について —高校バスケットボール選手のTSMIの特徴について—」総合保健体育科学，Vol.7,№1，p.99-110，1984.

14) 吉沢洋二「全日本女子ホッケー選手の心理的適性について —TSMIの縦断的データの分析—」名古屋経済大学市邨学園短期大学人文科学研究会人文科学論集，第35号，1984.

A Reseach on The Psychological Characteristics of The High School Rugby top players.

Takashi KATSUTA, Kazuhiro AWAKI

We conducted a survey about the mental state of the player who participated in six camps, where JAPAN HIGH SCHOOLS are selected and built up. TSMI test was used as a measure for the survey.

The results showed following distinctive features:

1) The players who come from the schools which have never had a JAPAN HIGH SCHOOLS player before have more strained anxiety and uneasiness for failure. The levels of anxiety and uneasiness increased more after the announcement of the JAPAN HIGH SCHOOLS nomination.
2) The players who were in a regular position and performed very well showed less anxiety and uneasiness. On the other hand, the reserves showed stronger anxiety and uneasiness. The regular players got high marks on the scale of the challenge for goal.
3) There are the cases which indicate that captain, who has to play a central role in the team, shows some characteristic scores on the scale of uneasiness, training-planning, etc.
4) There are some interrelation between the evaluation by the coaching staff and the scores on the scale of the willingness for improving technique and willingness for practice.